

—埋藏文化財緊急発掘調査報告書—

# 金 鑄 場 遺 跡

(第V次～第VI次調査)

1999

伊那市教育委員会  
伊那市総務部企画課  
伊那市経済部農政課

—埋藏文化財緊急発掘調査報告書—

# 金 鑄 場 遺 跡

(第Ⅴ次～第Ⅵ次調査)

1999

伊那市教育委員会  
伊那市総務部企画課  
伊那市経済部農政課

## 序

平成10年度地域農業基盤確立農業構造改善事業の一環として伊那市西箕輪羽広に所在する金鑄場遺跡の発掘調査（第Ⅴ次～第Ⅵ次）が、それぞれ4月上旬～4月下旬、7月下旬～9月上旬にわたって実施されました。

この、伊那市西箕輪羽広地区は、伊那市内では西部地区に、また、木曾山脈に連なる連山（いわゆる蔵鹿山一帯）の山麓扇状地の扇頂部に、さらに、大清水川の右岸段丘面の重複した位置に立地しています。湧水が各所に見られ、いかにも、原始人、古代人からの連綿として現代人達の居住しそうな場所であったので、当初より、今回の調査には、大きな期待がかけられていました。

発掘調査の結果は、報告書に見られるように予想していた程の成果はあがらなかったが、これは調査地域が限定されていたためであろう。

報告書の刊行に当たって、この発掘調査の実施に深いご理解をいただいた伊那市総務部企画課、またご指導をいただいた伊那市経済部農政課、さらには、この発掘調査に精励された友野良一調査団長をはじめとする調査団の各位そして、この調査のためにご理解、ご協力いただいた地元地権者各位や、ご尽力をいただいた作業員各位に対し、深甚なる謝意を表す次第であります。

平成11年3月

伊那市教育委員会  
教育長 保 科 恭 治

# まえがき（金鑄場遺跡の環境）

## 遺跡の位置

金鑄場遺跡は長野県伊那市大字西箕輪羽広南部地域に、また、中央アルプス（通称木曾山脈）に連なる蔵鹿山麓や経ヶ岳山麓より流れ出す大清水川、さらに、前述した両山麓より東へ押し出した山麓扇状地の扇頂部一帯に位置している。遺跡地の現況は山林、原野、畑地であり、これらの土層組成は押し出しの土砂の堆積がテフラ層の上に厚く覆っている。

金鑄場遺跡に至るまでの経路は二つの場合が、極、一般的である。まず一つとして、JR飯田線伊那市駅を下車して、北へ向かって国道153号線を約4、5km程行って、南箕輪村北殿集落の中心地付近を左折し、西へ向かって4km程遡ると大泉新田に到着する。さらに、西向き1km程で吹上に出る。ここで、左に折れて大泉川を渡り、南へ4km程行くと羽広集落に到着する。羽広の南に、羽広荘（昭和51年開設）、みはらしの湯（平成9年10月開設）の温泉保養施設がありこれらの施設周辺が遺跡地である。この路線を利用して金鑄場遺跡を訪れる最短距離はJR飯田線北殿駅で降りて、前述した道順に従っていく方法である。バス路線が確立されている。

別口の経路として伊那市街地より西に向かって、大萱・荒井線を約3km遡ると左手に信州大学農学部白い学び舎が木立のなかに鮮明に映えている。さらに、1km程西へ行くと、伊那市立西箕輪中学校、伊那市立西箕輪小学校に至る。ここから、県道福与・辰野線を北へ約1.5km行くと羽広集落が散在している。遺跡地は羽広集落の南端部地域に存在し、北側の境界線は大清水川に引けると思われている。これは第Ⅰ次～第Ⅳ次調査によって判明した。

## 地形・地質

伊那市西箕輪地区は如何なる地形・地質を呈し、如何なる場所に立地しているかを考えてみるに、伊那市においては一般的に標高が最も高く、従って、最も眺望が優れた地域に属しているといっても誰人も認めるところであり、疑う余地すら存在しない。

金鑄場遺跡付近にて、パノラマ状に視野を展開してみると次のようになる。東方にひととき険しく聳え立つ南アルプス（通称赤石山脈）の主峰の一つである仙丈ヶ岳、東駒ヶ岳（別名甲斐駒ヶ岳）があり、これらの前方に南北に連なる伊那山脈が走っている。南アルプスの懐深き地にて源を發する三峰川が二つの山脈の間をぬうようにして西に流れ、最終的に天竜川に合流している。三峰川・天竜川はともに国の一級河川になっている。

西側に目を転じて見れば、南北に細長く連なる山脈の一帯が存在し、その主峰は木曾郡と上伊那郡との境界線を表示する経ヶ岳である。これらの山麓は東南に傾斜して、天竜川の氾濫原に至って東の方側の、高遠、手良、箕輪等のそれと合致する。

西南の方角に高く見えるのが、西駒ヶ岳の前方の将基頭山である。この山の北側傾斜面と、経ヶ岳の南側傾斜面の合わさる鞍部地点が権兵衛峠であり、民謡「伊那節」に唄いこまれている。権兵衛峠を見直そうと伊那市経済部商工観光課が主体となって毎年秋の日曜日に「米の通」イベントを開催している。西駒ヶ岳の山麓に展開している集落が、横山、内の萱、大坊、平沢、小沢である。権兵衛峠付近より流出する水を集めて、小河川を成しており、これらが小沢川、小黒川と名称を変え、東流し、天竜川と合流して太平洋に注ぎ込んでいる。

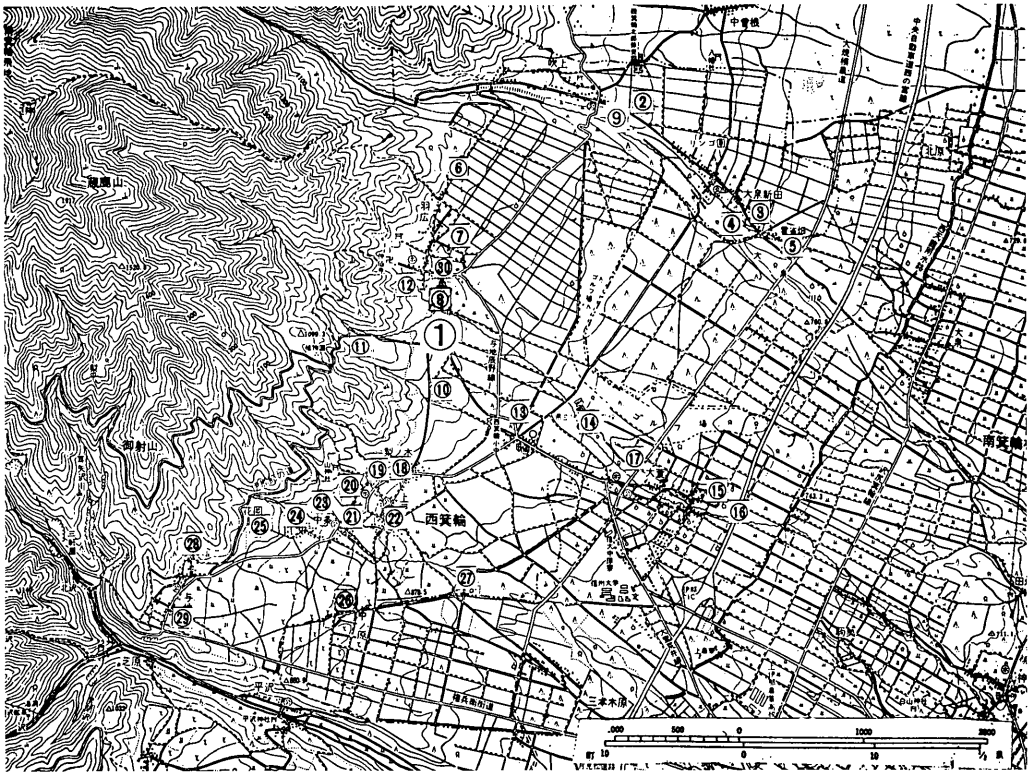
次に、西箕輪地区内に限定した地形並びに地質については、明治35年7月20日発行、長野県上伊那郡西箕輪尋常小学校校長、小林茂理編『わが郷土』を全面的に引用させてもらうことにした。それによると「細かに観察すれば、自ら三個の大区に分けて居る。(1)を大泉所傾斜地、(2)を蔵鹿傾斜地、(3)を御射山傾斜地と名を付けようと思う。一体、山は遠方より見て之を見れば、実はなかなかさようではない。いくつかの谷が峯に集まり、ひだをなして出来て居る。吾が経ヶ岳も、矢張其通りである。我が学校に面した谷のつまりは、経ヶ岳の内、字蔵鹿の嶺で、この傾斜の広がりがたる区域は、羽広、大萱の両部落を載せもちて、東南に走り、南箕輪村と伊那町とにつづき、ついに天竜河域に至り、高遠方面の西方に走れる傾斜に合して居る。これが即ち、蔵鹿傾斜地である。また、蔵鹿の西南に向へる谷、即ち字御射山の傾斜は、上戸、中条、与地の三部を載せつつ西南に走りたるも、南方駒ヶ岳の傾斜の北向かいする勢力に推され、方向を東北に取り、蔵鹿より東南向する傾斜と合いし、更に東向して走りたるかのように思はる。之を御射山傾斜地と名付けよ。一も一つ、蔵鹿の嶺の北に於て東北に開きたる大なる谷がある。これを大泉所と言う。この傾斜は、吹上、大泉新田、中曾根の三部を載せて、南、中の両箕輪に入り、天竜河域に至り、箕輪、東箕輪等の西向せる傾斜に出逢ふて居る。これが即ち大泉所傾斜地である。』

## 歴史的環境

西箕輪地区は経ヶ岳山麓、標高760m位から1,000m付近までにわたって各時代の遺跡が分布しているが、その標高差による時代的な差違は顕著ではない。また、分布地域が、西箕輪地区遺跡分布図を参照していただければ、一目瞭然であるが、だいたい、四形態に分類が可能である。

2～5、9は大泉川周辺、13～17は大清水川周辺、1、6～8、10～12、18～25、28～30は山麓扇状地上、26～27は無名の多くの沢が入っている場所等であるが、いずれにしろ、水利の利便性が良好な場所に確実に集中している事実は明瞭である。遺跡分布の内訳は旧石器時代4カ所、縄文時代早期4カ所、縄文時代前期4カ所、縄文時代中期25カ所、縄文時代後期8カ所、縄文時代晩期3カ所、弥生時代後期5カ所、古墳時代1カ所、奈良・平安時代12カ所、中世6カ所、近世2カ所である。

(飯塚政美)

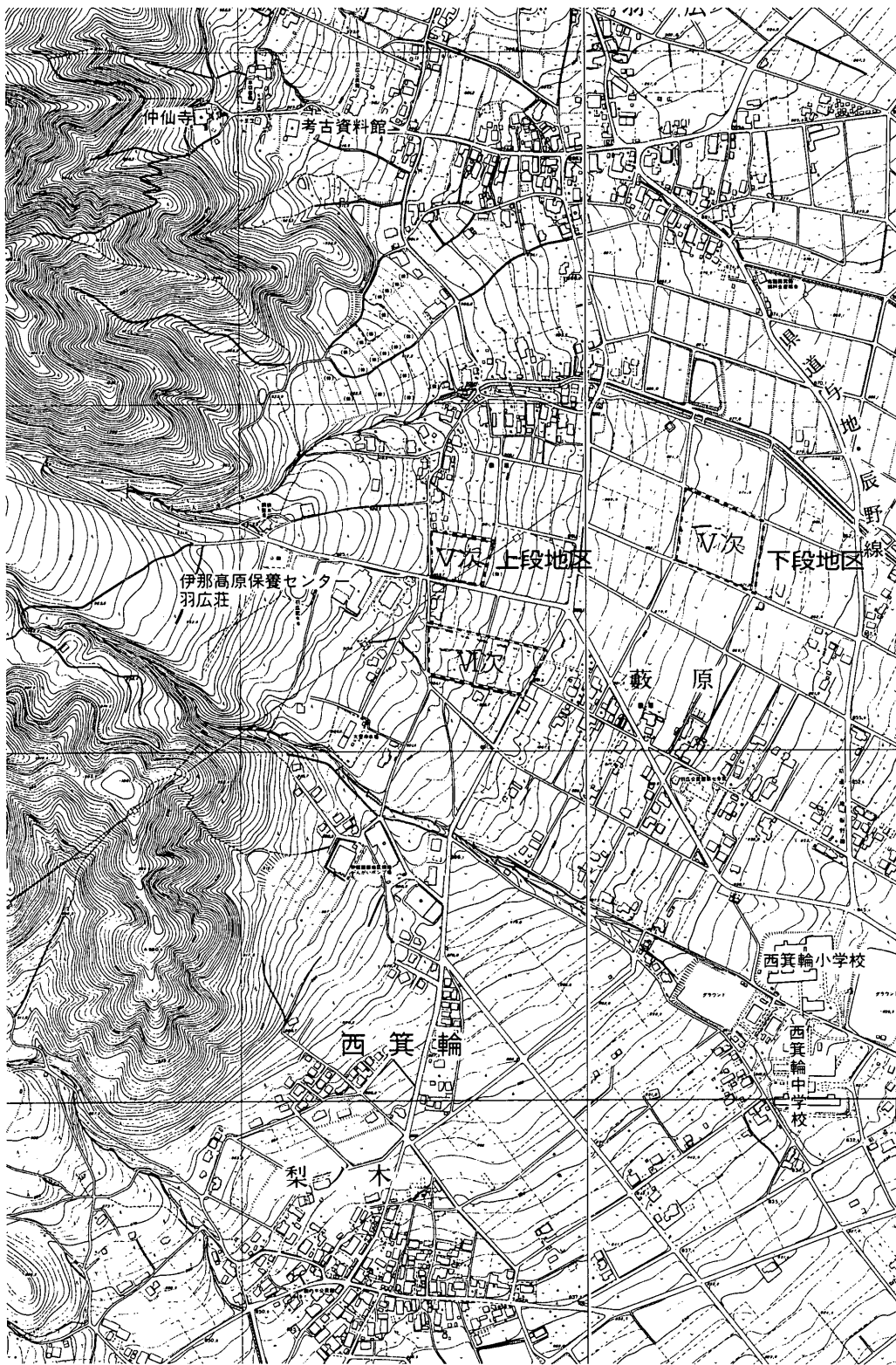


西箕輪地区遺跡分布図

遺跡の名称

- |           |          |           |           |
|-----------|----------|-----------|-----------|
| ① 金 鑄 場   | ② 桜 畑    | ③ 久 保 田   | ④ 塚 畑     |
| ⑤ 高 根     | ⑥ 北 割    | ⑦ 田 代     | ⑧ 古 屋 敷   |
| ⑨ 中 道 南   | ⑩ 上 溝    | ⑪ 蔵 鹿 山 麓 | ⑫ 経ヶ岳山麓   |
| ⑬ 西箕輪小学校北 | ⑭ 伊那養護学校 | ⑮ 熊野神社    | ⑯ 在 家     |
| ⑰ 大 萱 西   | ⑱ 殿 屋 敷  | ⑲ 宮 垣 外   | ⑳ 天 庄 1   |
| ㉑ 天 庄 2   | ㉒ 上 戸    | ㉓ 富 士 垣 外 | ㉔ 堀 の 内   |
| ㉕ 小 花 岡   | ㉖ 中 の 原  | ㉗ 下 の 原   | ㉘ 与 地 山 手 |
| ㉙ 与 地 原   | ㉚ 財 木    |           |           |





第V次～第VI次調査地区 (1 : 10,000)



## 例 言

1. 本書は、平成8年度に実施された温泉活用施設建設土地造成に伴う第Ⅰ次緊急発掘調査、地域農業基盤確立農業構造改善事業（苺団地土地造成）に伴う第Ⅱ次緊急発掘調査、平成9年度に実施された地域農業基盤確立農業構造改善事業（苺団地土地造成）に伴う第Ⅲ次、第Ⅳ次緊急発掘調査、平成10年度に実施された地域農業基盤確立農業構造改善事業（苺団地土地造成）に伴う第Ⅴ次、同じ事業でふれあい広場施設（ふれあい体験農園整備）に伴う第Ⅵ次緊急発掘調査を集大成した埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。
2. この緊急発掘調査は伊那市長の委託により、伊那市教育委員会が遺跡発掘調査団を編成し、試・発掘調査団に事業を委託して実施した。
3. 本調査は、平成10年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。  
飯塚政美  
◎図版作製者  
・遺構及び地形実測図 友野良一 飯塚政美 高松慎一  
・土器拓影 本田秀明 高松慎一  
・土器及び陶器実測図 本田秀明 高松慎一  
◎写真撮影者  
・発掘及び遺構 友野良一 飯塚政美  
・遺物 友野良一 飯塚政美
5. 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会がおこなった。
6. 出土遺物、遺構図及び実測図面類は伊那市考古資料館に保管してある。

# 金鑄場遺跡 (第V次調査)



# 目 次

## 目 次

## 挿 図 目 次

## 図 版 目 次

第Ⅰ章 発掘調査の経過	4
第1節 発掘調査に至るまでの経緯	4
第2節 調査の組織	4
第3節 発掘調査日誌	5
第Ⅱ章 調 査	7
第1節 調査の概要	11
第2節 遺構と遺物	11
(1) 縄文時代の遺物	11
(2) 平安時代の遺構と遺物	11
第Ⅲ章 所 見	16

挿 図 目 次	図 版 目 次
第1図 地形及びトレンチ配置図（上段地区）	図版1 遺跡遠景（下段地区）
第2図 地形及びトレンチ・遺構配置図（下段地区）	図版2 発掘調査状況（上段地区）
第3図 縄文土器拓影	図版3 発掘調査状況（上段地区）
第4図 第4・5号住居址実測図（上）	図版4 発掘調査状況（上段地区）
第5号住居址竈断面図（下）	図版5 遺 構（下段地区）
第5図 第4・5号住居址出土遺物分布図	図版6 遺物出土状況（下段地区）
第6図 第4号住居址出土遺物実測図	
第7図 第5号住居址出土遺物実測図	
第8図 第5号住居址出土遺物実測図	

# 第 I 章 発掘調査の経過

## 第1節 発掘調査に至るまでの経緯

今回、発掘調査の対象となった金鑄場遺跡は地域農業基盤確立農業構造改善事業（母団地土地造成）に伴う緊急発掘調査であり、調査実施に至るまでには各種の保護協議、事務手続が行われ、それらを流れに沿って記しておくことにする。平成9年9月25日に長野県教育委員会と伊那市とで保護協議を実施する。

平成10年4月1日付けで、伊那市長小坂愷男と市内遺跡試・発掘調査団長友野良一両者間で埋蔵文化財包蔵地試・発掘調査委託契約書を取りかわす。

平成10年4月1日付けで、文化庁長官宛に埋蔵文化財発掘調査の通知について（第98条の2第1項の規定による）を提出する。

平成10年5月6日付けで、金鑄場遺跡第V次発掘調査終了届を長野県教育委員会教育長宛に提出する。

平成10年5月6日付けで、金鑄場遺跡第V次発掘調査出土埋蔵文化財の拾得についてを伊那警察署長宛に提出する。

平成10年5月6日付けで、金鑄場遺跡第V次発掘調査出土埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会へ提出する。

## 第2節 調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

### 伊那市教育委員会

- 委員 長 小田 切 仁
- 委員長代理 小坂 栄 一
- 委員 岸 敏 子
- 〃 小松 光 男
- 教育 長 保科 恭 治
- 教育次長 拓植 晃
- 事務局 酒井 俊彦（社会教育課長）
- 〃 伊藤 初美（社会教育課長補佐 女性室長）
- 〃 白鳥 今朝昭（社会教育係長）
- 〃 矢沢 謙 一（社会教育青少年係長）
- 〃 飯塚 政美（社会教育係）

事務局 牧田 としみ (社会教育係)

〃 高松 慎一 (〃)

#### 発掘調査団

団 長 友野 良一 (日本考古学協会会員)

調査員 飯塚 政美 (〃)

〃 本田 秀明 (長野県考古学会会員)

〃 高松 慎一 (上伊那郷土研究会会員)

作業員 城倉三成 那須野進 小松弘光 織井和美 有賀秀子 酒井とし子

大久保富美子 溝上美弥子 平沢昭 酒井公士郎 松下末春

小田切守正 (敬称略順不同)

### 第3節 発掘調査日誌

平成10年4月7日 伊那市考古資料館前庭にて発掘器材、測量器材の整備及び点検、さらに整頓する。

平成10年4月8日 前日と同様の作業を実施する。

平成10年4月10日 発掘現場にコンテナハウス、スペースハウス、簡易トイレを設置。午後バックフォーを現場まで運搬していただく。

平成10年4月16日 本日よりトレンチを上段地区へ東西に設定。その名称は南側から北側に向かって名を付け、北へ行くに従って、その数値は増していく。最終末のトレンチは第6号トレンチとなった。

平成10年4月17日 第5号トレンチ、第6号トレンチを西側から東側へと掘り進めていくが、遺物の出土はなにも無かった。午後、雨降りとなり、発掘作業を中止する。

平成10年4月20日 夏を思わせる程に暑い一日であった。下段地区の畑へトレンチを東西に入れると、ほんのわずかに土器片が出土する。

平成10年4月21日 金鑄場遺跡上段地区の第1号～第6号トレンチの写真撮影、実測を終える。下段地区の畑の東側に黒い落ち込みが見られ、これを第4号住居址と命名し、プランを確認する。

平成10年4月22日 第5号住居址、第6号住居址を検出。引き続き、第4号住居址を掘り下げていく。

平成10年4月23日 第4号住居址、第5号住居址は切り合い関係になっていた。大型のバックフォーを2台導入して、試掘確認調査を進めていくと、各所に住居址が検出された。

平成10年4月24日 雨降りだったがバックフォー2台にて遺構の試掘確認調査を実施する。

平成10年4月27日 第4号住居址、第5号住居址のドットマップ図の作成。ベルトを残して住居址の掘り下げを完了する。

平成10年4月28日 第4号住居址、第5号住居址のベルトを取り除き、掘り進める。先の二つの住居址の実測を開始する。全測図を作成する。連休があるのできちんとシートをかけておく処理を行じた。



平成10年4月30日 第4号

#### トレンチ掘りを進める

住居址、第5号住居址の完掘を終え、実測図を取り終える。竈の断ち割りを実施して、実測を済ませる。全測図に住居址ごとのレベルを数値化する。後片付けを済ませ、次の笠原の現場へ、発掘器材、測量器材を運搬する。本日にて、この現場の発掘を終了する。第6号住居址から第12号住居址までは埋土工法を採用して永久保存処置を講じた。

平成11年1月～平成11年2月 遺物の整理、実測、写真撮影、図版の作成、報告書を印刷所へ送る。

平成11年3月 報告書の校正。報告書の刊行。(飯塚政美)



皆んなで第5号住居址を掘り進める

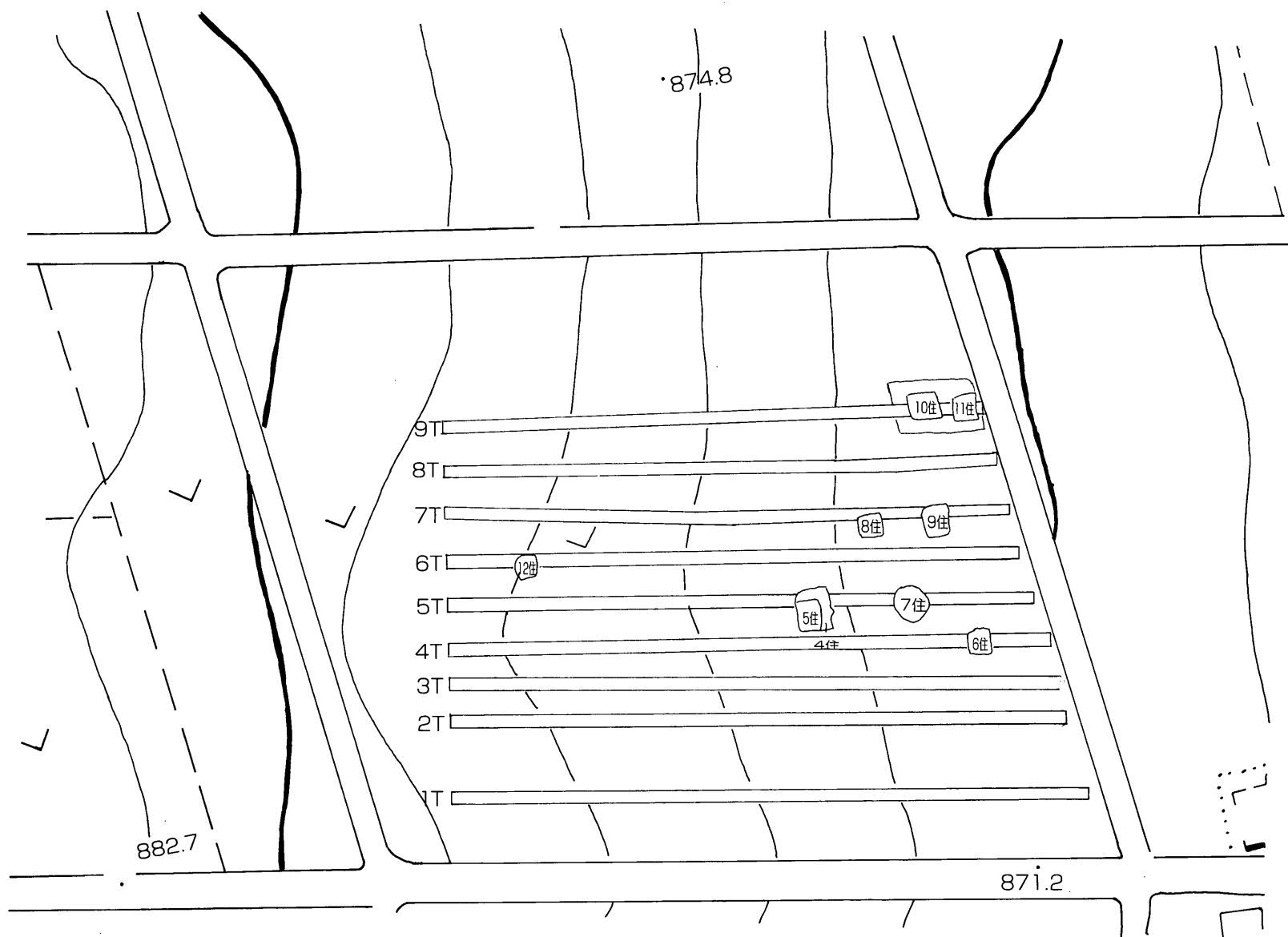
## 第Ⅱ章 調査



第1図 地形及びトレンチ配置図(上段地区)(1:1000)







第2図 地形及びトレンチ・遺構配置図 (下段地区) (1 : 1000)



## 第1節 調査の概要

今回の調査地区は羽広温泉の道を隔てたすぐ東側の一帯で、以前は牧草地として利用され、手入れがゆきとどいていて、青ジュータンを敷き詰めたように青々と牧草が茂っていた。詳細な調査方法は第1図 地形及びトレンチ配置図（上段地区）を参照のこと。この地区内での遺構・遺物の検出は無かった。苅田地造成の関連事業に伴って発掘調査を進めてきたが、そのうち、第Ⅱ次調査を実施した東側の牧草畑が今回の調査対象地区となった。

実際に調査を開始するに当たって、西側から東側への山麓部からの押し出し、さらに、土地改良実施時の造成土が厚く覆いかぶさっていると判断されたために、第2図 地形及びトレンチ・遺構配置図（下段地区）のように自然傾斜面に沿って西から東へのトレンチを、南から北へ、第1号トレンチから第9号トレンチを設定し、掘り進めてみた。結果的に、厚い堆積土の上に平安時代の竪穴住居址が9軒検出された。（住居址の番号は第Ⅰ次調査からの通し番号によっているためにこのような命名方法を採用している）

発掘調査を実施して、全て検出された住居址を掘り尽くすのが、良い方法ではないと判断して、实际的に、造成して破壊されてしまう第4号住居址、第5号住居址を掘り進め、その他の住居址は造成レベルに達しないので、全測図にて記録に残して、後は埋土して、永久的に保存する措置を講じた。

遺物は縄文中期土器片、縄文中期石器と平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製の刀子が出土した。詳細については次の第2節 遺構と遺物で述べる。

## 第2節 遺構と遺物

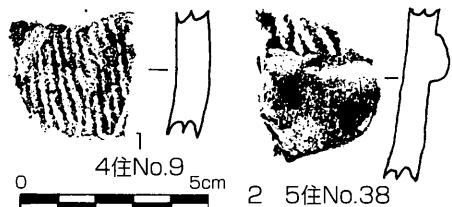
### (1) 縄文時代の遺物（第3図）

第3図（1～2）に掲載した土器片は双方とも縄文中期中葉、いわゆる勝坂式に含まれると思われる。その内、(1)は第4号住居址、(2)は第5号住居址の覆土上層面よりそれぞれ出土したのであり、従って、上からの落ち込みの可能性が最大である。(1)は斜縄文地が主文様で、茶褐色を呈し、胎土中に長石、雲母を多量に含み、焼成は良好。(2)は無文様地に幅広ろで、高めの横位隆帯文を貼り付け、その上に斜縄文が規則的に走向している。黒褐色を呈し、多量の雲母、長石を含み、焼成は良好である。

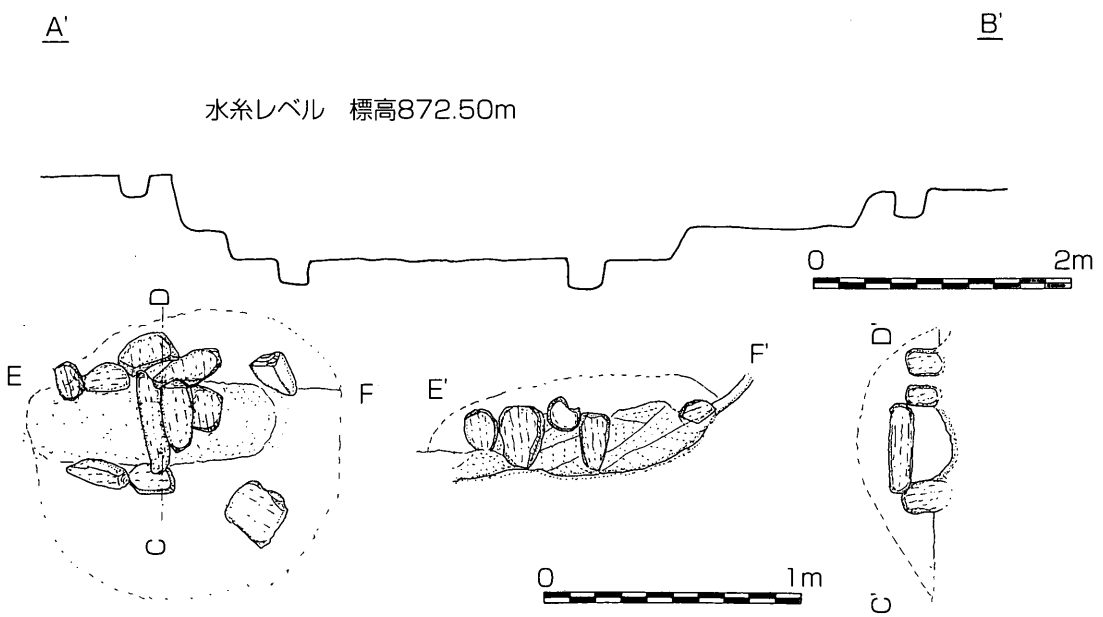
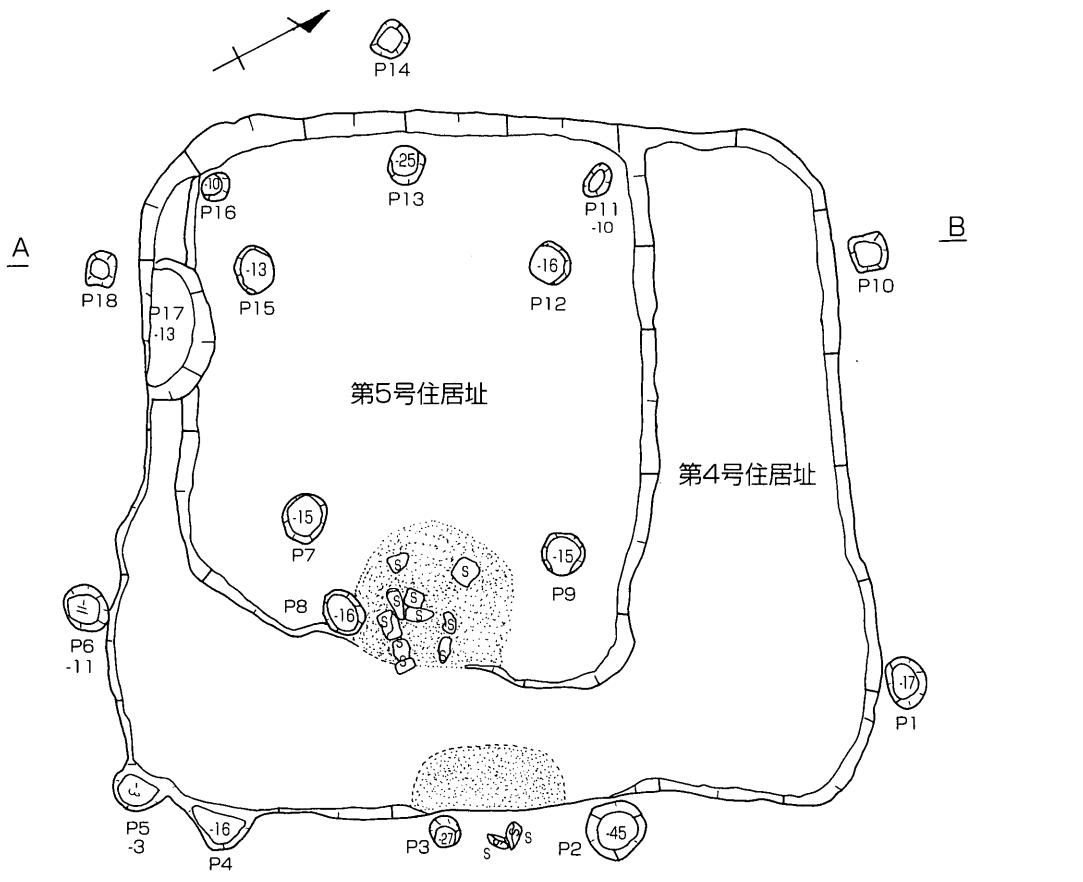
### (2) 平安時代の遺構と遺物

#### 第4号住居址（第4～6図 図版5）

本址は第5号トレンチの東側の部分に検出され、南北5m50cm程、東西5m30cm程の規模を



第3図 縄文土器拓影



第4図 第4・5号住居址実測図(上) 第5号住居址電断面図(下)

有し、表土面下60cm位の黄褐色砂礫堆積土を掘り込んで構築した隅丸方形の堅穴住居址である。四つの辺はともに大小様々な凹凸を呈しているが、全般的にみて、前述したように隅丸方形と見なしてもよからう。

本址の南西から北東にかけて全周しているかのごとくに大部分は第5号住居址によって切られており、住居址の正確なる実態は把握できなかった。従って、現存している部分から述べていくことにする。壁高は北で25cm位、南で50cm位を測り、その状態は前者は外傾気味で、やや堅く、良好。後者は前者同様に外傾気味で、一面に細礫が露出していた。

床面は部分的に若干の凹凸が認められ、かたい叩きを呈し、部分的に細礫や拳大程の礫が目立っていた。柱穴は床面上のものは第5号住居址に切られたために、はっきりしなかった。北壁、東壁、南壁に沿って、規則的に柱穴が配されており、おそらく母屋柱的な用途と想定される。竈は東壁中央部付近に構築され、南北1m20cm位、東西50cm位の規模を有していたと残存している焼土塊より判断が可能である。構築当初はしっかりとした石組粘土竈であったと思われるが、第5号住居址によって切られた際に大部分が破壊されたと思われる。骨格となった石は第5号住居址の竈に再利用された可能性が強いと思われる。

遺物は土師器、須恵器が出土し、よって、平安時代中期頃の住居址と思われる。

#### 遺物 (第6図)

第6図の1は土師器坏で、口縁径13.8cm、高さ4.1cmを測る。腰部はやや広がり、口縁は急激に外傾しながら立ち上げる形で、口唇部は若干丸味を呈す。内・外側はともに赤褐色を呈し、底部は回転糸切り底である。内・外面ともにロクロ痕が顕著である。2は須恵器坏で、口縁径13.7cm、高さ3.8cmを測り、回転糸切り痕が目にも鮮明に映る。器厚は3mm～5mmと薄手から中厚手に属し、この種類としては極一般的である。口唇部は丸味を呈し、口縁はやや外反し、腰部はややつぼまる。黒灰褐色を呈し、細かな長石粒を含んでいる。

3は須恵器坏であり、細片のために図上復元実測をこころみた。口縁径12.0cm、高さ3.6cm、底径5.9cmを測り、ほんのわずかに回転糸切り痕が認められる。器厚は薄手に属し、口縁はやや外傾気味を呈する。灰褐色を呈し、細かな長石粒を含み、よくいわれている生焼き状態なものである。

#### 第5号住居址 (第4～5図 図版5)

本址は第4号住居址の床面を掘り込んで構築した堅穴住居址であり、いわば、第4号住居址を切ったかっこうになっている。黄褐色砂礫堆積土層面を掘り込んで構築し、プランはところどころで凹凸はあるが、全般的に見て、隅丸方形を成している。規模は南北3m70cm位、東西4m25cm位の測定値を示し、やや小規模的である。壁高は西側で50cm位、東側で15cm程度をそれぞれ測定でき、大般において垂直気味で、壁面に多量の細礫が露出している状態を具に検分できた。

主柱穴は4本で、四隅のコーナーよりやや内側にほぼ等間隔で1本ずつ穿けられており、そ

れらはP7、P9、P12、P15であった。補助柱としてP11、P13、P16、母屋柱的としてP14がそれぞれ考えられる。

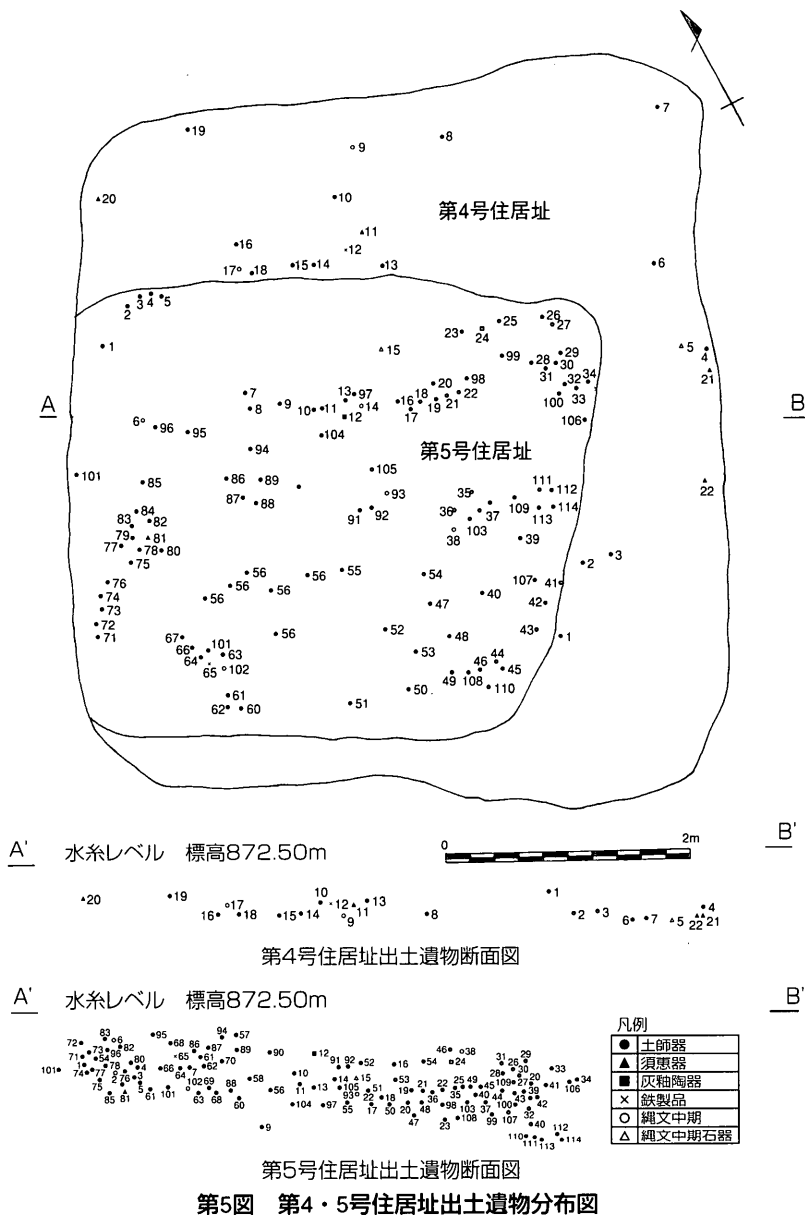
竈は東壁のほぼ中程にきちんと構築された石組粘土竈であり、その規模は南北1m20cm程、東西1m10cm程が測定可能である。粘土の貼り付けは良好であったと見えて、その残存状態は見事であった。周辺状況、切り合い関係からみて、本址の構築時に第4号住居址の竈を破壊して、その石を持ってきて再使用したのではない。

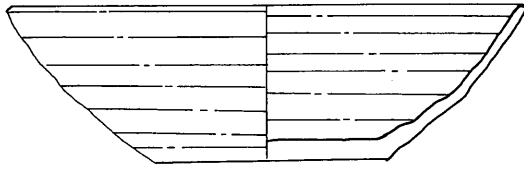
出土遺物は相当量であった。土師器、須恵器が圧倒的に多く、わずかに2片の灰釉陶器片が確認でき、本址の時期決定に大いに役立つのである。特殊な遺物としての鉄製の刀子が1点出土している。よって、本址は平安時代中期頃と推定され得よう。

### 遺物 (第7～8図 図版6)

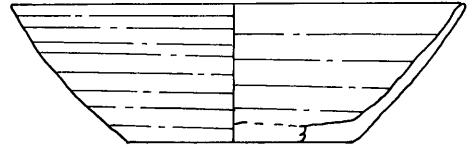
第7図の1は土師器碗で、口縁径14.1cm、高さ5.0cmを測る。胴部は内弯気味で、口縁部はやや外反する。内黒で、両面にロクロ痕が残る。糸切り底の様相を呈し、焼成は良好である。

2・3は口縁部を欠損した土師器坏で、ともに内黒、ロクロ痕を認める。3は糸切り底様式を導入している。

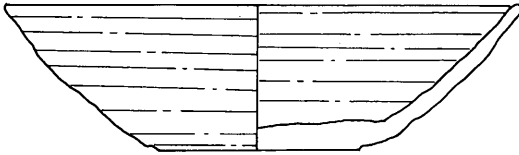




1  
No.19



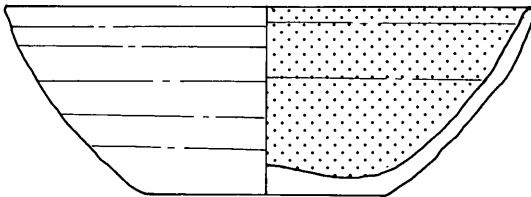
3  
No.22



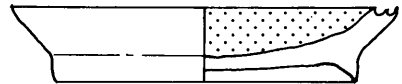
2  
No.20



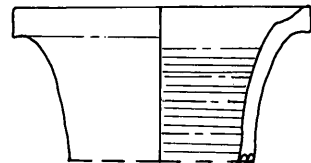
第6图 第4号住居址出土遺物実測図



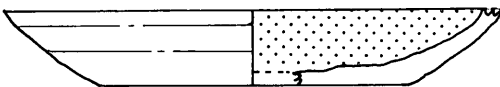
1 No.25



2 No.105



4 No.24



3 No.108

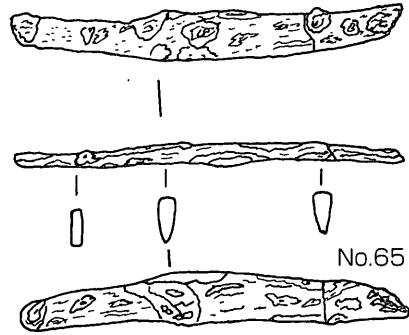


第7图 第5号住居址出土遺物実測図



4は灰釉陶器長頸壺の口縁部破片で、口唇部は大きく、くの字状に外反する。内・外面ともにロクロ痕が明確で、製作工程がはっきりと読み取れる。釉の掛りは不均一であり、良品とはならないと思われる。

第8図は鉄製の刀子であり、錆びの進行度合いは鈍く、ほぼ完型の状態で出土している。



第8図 第5号住居址出土遺物実測図(1:2)

### 第三章 所見

今回の調査日程及び調査結果については、前段で記述してきた通りである。検出された遺構は平安時代中期の竪穴住居址9軒であったが、原則として永久保存的な姿が最も好ましい体制であるので、造成によって完全に削土される第4号住居址、第5号住居址の発掘調査を進め、その他、完全に埋まってしまう残り7軒は全測図の中に標示しておいた。

本遺跡地の遺物について極、簡略的に述べてみる。土器編年から見て縄文中期中葉と想定でき得よう。これらは斜縄文と隆帯文が主流となっている。

出土状態からして上からの流失の可能性が強いと想定される。本文中では関東編年を採用して一括的に「勝坂式」と述べているが、信州を含めた中央高地では「藤内式」「井戸尻」の二つに細分類されている。

次に、今回検出された平安時代中期の第4号住居址、第5号住居址の二軒とそれらに付随した遺物について集約的に述べて見ることにする。

第4号住居址は南北5m50cm位、東西5m30cm位の数値を表示する竪穴住居址で、平面プランは隅丸形状を呈する。ただし、本住居址は大部分が第5号住居址によって切られている。構築当初は石組粘土竈はしっかりと造られていたと思われるが、その材料一式は第5号住宅址を造る時にほとんど持ち去られており、今回の調査ではわずかに小さな石と焼土の残骸が認められたのにすぎなかった。

本址から土師器、須恵器が出土している。糸切り底、ロクロ痕の状態より11世紀の所産であり、国分期の新式に含まれると思われる。

第5号住居址は一辺が4m前後で、隅丸形状の平面プランを呈する竪穴住居址で、しっかりとしたやや大型化を成す石組粘土竈で、第4号住居址を切った状態で構築してある。規模は第4号住居址よりやや小さめであり、11世紀後半頃と想定できえよう。本址出土の土師器は比較的に内黒が多く、さらに、ロクロ痕、糸切り痕が顕著である。さらに、灰釉陶器片が2点出土している。これは胎土からみて、猿投窯一帯の産であろう。

最後に、本報告書刊行に当たり、関係諸機関、関係各位に対し、深く敬意の念をささげる。

(飯塚政美)

# 圖 版



遺跡地を北東より眺む（上）

遺跡地を東側より眺む（下）



第1号トレンチ（上）

第2号トレンチ（下）



第3号トレンチ（上）

第4号トレンチ（下）

図版4  
発掘調査状況（上段地区）



第5号トレンチ（上）

第6号トレンチ（下）



第4・5号住居址（上）

第5号住居址竈（下）

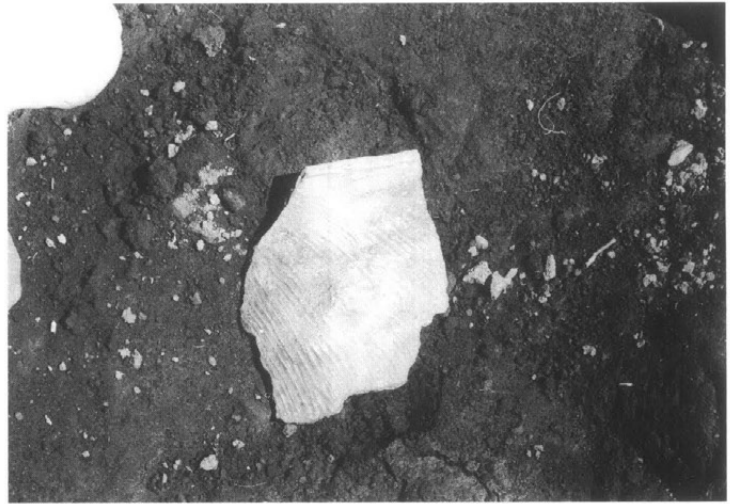
図版 6 遺物出土状況 (下段地区)



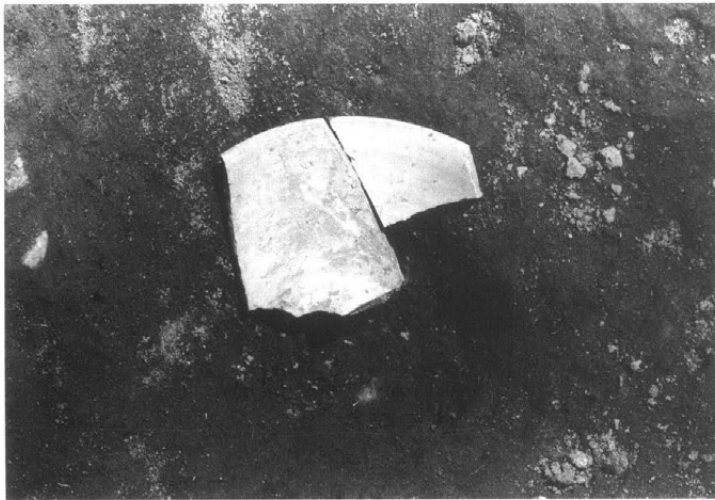
土師器出土状況

(第5号住居址)

土師器出土状況



(第5号住居址)



須恵器出土状況

(第5号住居址)



## 報告書抄録

ふりがな	かないばいせき							
書名	金鑄場遺跡(第V次調査)							
副書名	地域農業基盤確立農業構造改善事業(苺団地土地造成)							
巻次								
シリーズ名	埋蔵文化財緊急発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	友野良一 飯塚政美							
編集機関	伊那市教育委員会							
所在地	〒396-8617 長野県伊那市大字伊那部3050番地 TEL0265-78-4111							
発行年月日	西暦1999年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °..°	東経 °..°	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かないば 金鑄場	ながのけん いなし 長野県 伊那市 にしみのわ はびろ 西箕輪 羽広	11	2599			平成10年 4月7日～ 平成10年 4月30日	15,000	苺団地 土地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
金鑄場	集落址	縄文時代 平安時代	平安時代竪穴住居 址 9軒		<ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文中期土器</li> <li>・縄文中期石器</li> <li>・平安時代の土師器</li> <li>・平安時代の須恵器</li> <li>・平安時代の灰釉陶器</li> <li>・平安時代の刀子</li> </ul>		集落址の実態がある程度解明できた	

# 金鑄場遺跡 (第Ⅵ次調査)



# 目 次

## 目 次

### 挿 図 目 次

### 図 版 目 次

第Ⅰ章 発掘調査の経過	4
第1節 発掘調査に至るまでの経緯	4
第2節 調査の組織	4
第3節 発掘調査日誌	5
第Ⅱ章 調 査	7
第1節 調査の概要	8
第2節 遺構と遺物	8
(1) 縄文時代の遺物	8
(2) 江戸時代の遺構	8
第Ⅲ章 所 見	11

挿 図 目 次	図 版 目 次
第1図 地形及びトレンチ・遺構配置図	図版1 遺跡遠景
第2図 縄文土器拓影	図版2 発掘調査状況
第3図 溝状遺構実測図	図版3 発掘調査状況
	図版4 発掘調査状況
	図版5 遺 構

# 第 I 章 発掘調査の経過

## 第 1 節 発掘調査に至るまでの経緯

今回発掘調査の対象となった金鑄場遺跡は地域農業基盤確立農業構造改善事業（ふれあい広場施設（ふれあい体験農園整備）造成）に伴う緊急発掘調査であり、調査実施に至るまでには各種保護協議、事務手続が行われ、それらの流れに沿って記しておくことにする。平成9年9月25日に長野県教育委員会と伊那市とで保護協議を実施する。

平成10年4月1日付けで、伊那市長小坂樫男と市内遺跡試・発掘調査団長友野良一両者間で埋蔵文化財包蔵地試・発掘調査委託契約書を取りかわす。

平成10年7月15日付けで、文化庁長官宛に埋蔵文化財発掘調査の通知について（第98条の2第1項の規定による）を提出する。

平成10年9月10日付けで、金鑄場遺跡第VI次発掘調査終了届を長野県教育委員会教育長宛に提出する。

平成10年9月10日付けで、金鑄場遺跡第VI次発掘調査出土埋蔵文化財の拾得についてを伊那警察署長宛に提出する。

平成10年9月10日付けで、金鑄場遺跡第VI次発掘調査出土埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会へ提出する。

## 第 2 節 調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

### 伊那市教育委員会

委員 長	小田切	仁
委員長代理	小坂	栄一
委員	岸	敏子
〃	小松	光男
教育 長	保科	恭治
教育次長	拓植	晃
事務局	酒井	俊彦（社会教育課長）
〃	伊藤	初美（社会教育課長補佐 女性室長）
〃	白鳥	今朝昭（社会教育係長）
〃	矢澤	謙一（社会教育青少年係長）
〃	飯塚	政美（社会教育係）

事務局 牧田 としみ (社会教育係)

〃 高松 慎一 (〃)

#### 発掘調査団

団 長 友野 良一 (日本考古学協会会員)

調査員 飯塚 政美 (〃)

〃 本田 秀明 (長野県考古学会会員)

〃 高松 慎一 (上伊那郷土研究会会員)

作業員 城倉三成 那須野進 織井和美 諸田勉 酒井公士郎 小田切守正

倉沢敏一 (敬称略順不同)

### 第3節 発掘調査日誌

平成10年7月23日 伊那市考古資料館前庭にて発掘器材、測量器材の整備及び点検を実施する。

平成10年7月24日 前日と同様の作業を実施する。

平成10年7月27日 発掘器材、測量器材一切を現場まで運搬する。

平成10年7月29日 スペースハウス、コンテナハウス、簡易トイレを現場に建てる。

平成10年8月3日 トレンチ掘りを開始するが、遺構の検出は何もない。

平成10年8月4日 トレンチ掘りを北へ、北へと進めるが、何も検出されなかった。トレンチ名は南から北へ向かって、第1号トレンチから第18号トレンチと名付け、傾斜に沿って西側から東に掘り進める。西側から東側はかなりの傾斜をもっていた。

平成10年8月5日 トレンチ掘りを北側へ進めると、川や井筋が幾重にも東西に走っていた。

平成10年8月6日 井筋の掘り下げを進める。

平成10年8月10日 トレンチ掘りを進めて、最も北側の井筋を掘り下げていくと、流れが強く、水量が多量にあたる部分はよく掘れており、礫が多量に露出していた。底部には細礫が多く堆積していた。

平成10年8月11日 下の畑のトレンチ掘りを全て完了する。一番北側のトレンチ内に発見された井筋をほぼ掘り上げる。道を隔てた西側の牧草畑の南側にトレンチを入れる。

平成10年8月12日 トレンチ掘りを進めたが、雨が激しくなってきたので、午前10時に作業中止。

平成10年8月17日 トレンチ掘りを進めるが、何も検出されずに、大きな溝の流れが目だった。

平成10年8月21日 トレンチ掘りを進める。縄文中期土器片出土。大きな溝が検出され

そのプラン確認に努める。

平成10年8月24日 トレンチ掘りを北側へ進め、この時点で検出された溝を掘り進める。

平成10年8月25日 トレンチ掘りを北へ、北へと進めるが、何も検出されずに、ただ、大きな自然の溝址が存在しただけである。一般的に砂礫層の堆積が厚かった。

平成10年8月27日 トレンチ掘りは本日をもって全てを完了する。

平成10年8月28日 全測図の作成をする。埋め戻しを開始する。

平成10年8月31日 発掘現場の埋め戻しをする。

平成10年9月1日 埋め戻しを進める。

平成10年9月2日 トレンチの埋め戻しをする。西側牧草地の南側のトレンチ3本を埋め戻す。

平成10年9月3日 井筋を清掃して、写真撮影を終える。トレンチの埋め戻しをする。

平成10年9月4日 上の畑のトレンチを埋める。井筋の平面実測をする。

平成10年9月8日 井筋の断面実測をする。井筋最東端の地層断面図を作成。井筋の埋め戻しを西側より実施する。

平成10年9月9日 埋め戻しを完了する。後片付けをして、発掘調査は全て完了。

平成11年1月～平成11年2月 遺物の整理、実測、写真撮影、図版の作製、報告書を印刷所へ送る。

平成11年3月 報告書の校正。報告書の刊行 (飯塚政美)



炎天下 掘れども 掘れども何も出ず

## 第II章 調査



第1図 地形及びトレンチ・遺構配置図 (1:1000)



## 第1節 調査の概要

今回の調査地区は第IV次調査地区の道を隔てたすぐ南側の傾斜の強い牧草畑一帯であった。この地区も山麓扇状地の扇頂部に該当しており、山の押し出しによる堆積土が幾層にもわたって覆い伏さっていた。安定した地上まで掘り進めるには数メートルの深さまで掘り込まなければならなかった。

掘り進めてみると、耕作土は割合に安定していたが、その下層は砂礫土の堆積が反復した状態であり、その面に第1図で示したように自然の大きな沢が幾筋も、自然傾斜面に応じて走っていた。調査を進めていくと、後で掲載する縄文中期土器がわずかに2片出土したのみであり、この時期の遺構の存在性はきわめて希薄と想定できる。おそらく、この2片は破片の摩耗度が多く、おそらく上から流れてきたものであろう。江戸時代の溝状遺跡は古い文献に記された事実があるので、それに基づいて判別したわけである。

## 第2節 遺構と遺物

### (1) 縄文時代の遺物

第2図(1、2)はトレンチ内の砂礫土層中より出土した縄文中期後葉の土器片である。前述したように割口は摩耗度が顕著であり、上からの流れによる可能性が濃厚と察せられる。



第2図 縄文土器拓影(1:2)

1の破片上部はヘラによる幅広ろの沈線が横走し、中・下部に至っては斜縄文が美的感度をかもし出している。赤褐色を呈し、焼成は良好で、少量の長石を含む。

2は破片中央部に低い隆帯とヘラによる幅広ろ沈線文が若干、斜目状で走向し、その上・下に連続刺突文を押捺してある。茶褐色を呈し、焼成は良好で、少量の雲母を含んでいる。(1~2)はともに加曾利E式に属していると思われる。

### (2) 江戸時代の遺構(第3図 図版5)

第9号トレンチの一角にかかって検出され、黄褐色砂礫層を掘り込んで構築し、流路はところどころで蛇行状を呈し、流れが直接的に当たる個所は部分的に掘れないように石を貼り付けてあった。流路は西から東へ流れに応じて傾斜を成し、東へ行つて二又状に分かれていた。その規模は最大幅3m50cm程度、最小幅70cm程度、最深部で2m50cm程度、最浅部で50cm程度の数値をそれぞれ示している。

壁面はやや傾斜し、堅く、ところどころに細礫が露出していた。軟弱な部分は水によって洗い流されたような状態であった。底面は拳大程から一抱え程の多種多様な石が全面的に密集して検出され、大部分は水の洗いだしによって露出したのであろうが、部分的に石を敷き詰めた個所が認められた。

遺物の出土は何もないが、構築方法からみて江戸時代の所産であろう。

(飯塚政美)

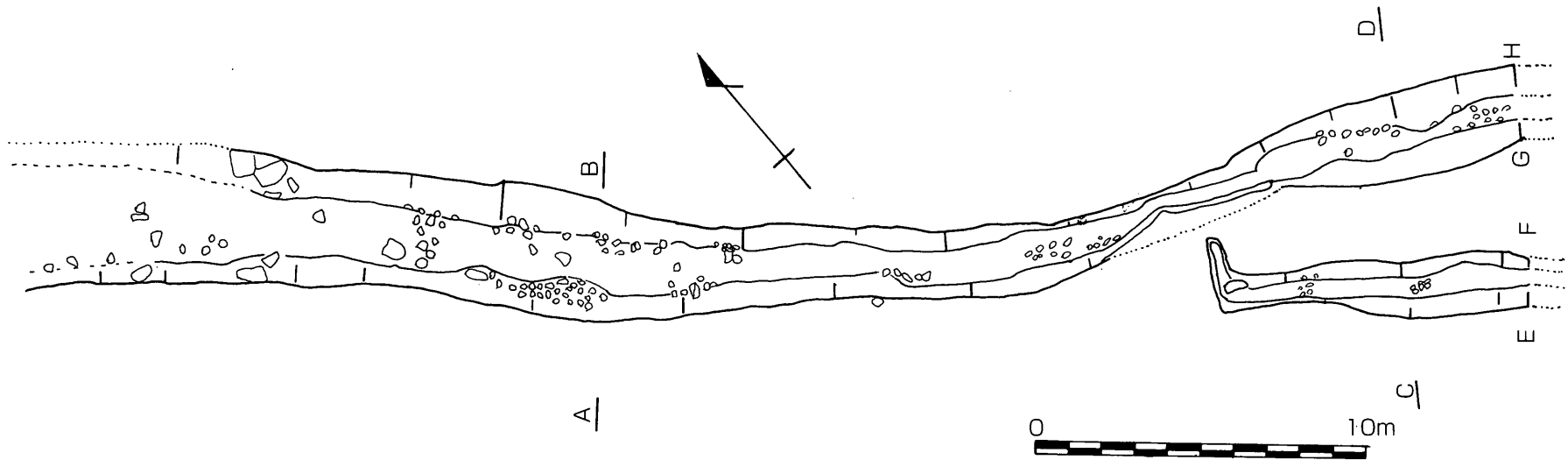
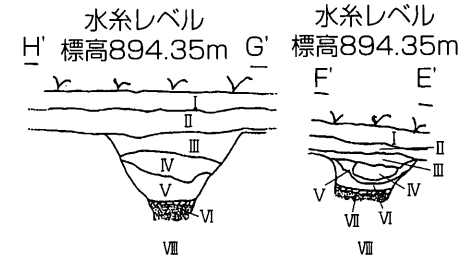
A' 水系レベル  
標高898.25m B'



C' 水系レベル 標高895.56m D'



- I 黒色土砂礫層(耕作土)
- II 黒褐色砂礫層(埋立て)
- III 黒褐色土層(砂礫が少ない埋立て)
- IV 黒色土層
- V 黒褐色土層(褐色が強い)
- VI 褐色土層(粒が荒い石を含む)
- VII 砂礫層
- VIII 黄褐色砂礫層



第3図 溝状遺構実測図



### 第三章 所 見

今回、試掘調査を実施した一帯は通称「上溝原」という小字名がつけられている。この意味合いは何を指しているのであろうか。「溝」とは一般的に凹地地形が連想できる。上溝原一帯は蔵鹿山麓より発達した扇状地の扇頂部に位置しており、現地を訪ねてみれば、一目瞭然であるが、幾筋もの小さな沢や凹地が西から東に向かって現存している。さらに、実際に掘り下げてみれば、その数は増加するに相違ないと思われる。前述したように今回の調査で検出された溝状遺構は新発見の事実となった。溝は自然的なものか、人為的なものかを的確に判断しなければならない。仮に人為的なものであったならば、取水位置、流路筋、流路末の位置付けを明確化しなければならない。なぜならば小地域における農村集落の発達の如何は水利利用に大いに関連しているからだ。

今回の報告書で記述した溝状遺構はその形態からして人為的な可能性が濃厚と想定される。従って、この水路利用を歴史的に考察してみなければならない。そうした場合、取水位置は大清水川の上流地域一帯と考えられ、地形的に見て、開鑿当時の土木技術で可能な流路筋を選択して工事を進捗していったのであろう。流路筋の方向は東に走向しており、末流は大萱集落に至っている模様である。このへんで「大萱村」とそれに隣接している「寄合新田」についての集落発達史について触れてみる。平凡社発刊『長野県の地名』には次のように記されている。

**大萱村** 現 伊那市大字西箕輪 大萱

蔵鹿山の東に広がる扇状地の中央を占めており、広大な村域を持つ。藪原新田・山王新田・寄合新田等の親村である。大萱の地名の起りは「大小屋」かとも考えられる。天正19年(1591)の信州伊奈青表紙之縄帳に村高は「貳百貳拾貳石三斗九升壹合 大屋」と記されている。

『上伊那誌』によれば、藪原新田は明暦3年(1657)の取立で初検地は寛文4年(1664)、元禄11年(1698)の石高は七六石八斗四升二合とあり、山王新田は取立が寛文12年、初検地が延宝2年(1674)、元禄11年の石高は一四石一斗九升六合となっている。

扇状地上の村で用水に恵まれず、蔵鹿山の沢水を隣村羽広村と分水して飲料水に供した。地下水も深く竖井戸の深さは12間以上にも及ぶ。明治5年(1872)、筑摩県属本山盛徳の力で大萱田井堰が開削された。大萱にある「井堰開鑿五十周年記念碑」には、「大萱田用井堰ハ水源ヲ北沢山宇赤岩ニ発シ延長ニ里灌漑反別約十五町歩ニ亘ル明治五年四月起工全年六月竣工ス」とある。

寛延2年(1749)成立の『新著聞集』に「信州高遠斬大蛇」と題して高遠の保科肥後守(正光、1561-1631)の時、箕輪(箕輪)の大茅原に大蛇がいて家臣が退治したことが記載されている。

**寄合新田** 現 伊那市大字西箕輪 大萱

大萱村の村内およびその周辺に帯状に隣接し、一地域にまとまることなく、しかも人家もなく、それで独立村的な性格を持っていた特殊な新田村。

関盛胤著『伊那温知集』の大萱村新田の項に「寄合新田 高五拾九石八斗壹升四合」とある。

大萱村は近郷12ヵ村との入会地を無断で開墾したので入会村々ではこれを訴え、寛保2年(1742)裁許を得、検地打出しの分十三町七段二畝五歩半を田畑村(現上伊那郡南箕輪村)・南殿村(同)・神子柴村(同)・羽広村の四ヵ村へ払い下げ寄合新田と称した。最寄りの地を四分し、四ヵ村において銘々公私用相勤めたが、宝暦9年(1759)田畑・神子柴両村はこれを大萱村に譲渡し、寛政元年(1789)には南殿村も大萱村へ譲渡したので、大萱・羽広の両村で割請分を保って明治8年(1875)に至り西箕輪村となった。なお天保5年(1834)の信濃国郷帳には「高六拾貳石六斗九升九合 寄合新田」とある。

寄合新田は入会の一独立単位で、独立村同様の権利義務を保有し、大部は大萱村に吸収され羽広・大萱両村に支配されてもその性格は変わらず、独立村的存在であった

西箕輪を含めた伊那西域一帯は江戸時代初期に新田開発が行われ、新しき村が発生し、それらには「新田」という名称がつけられ、「元村」とはっきりと区別されていた。これら新田開発に功績を残したのがかの有名な木下陣屋代官加集空乃助であり、現在、伊那市西箕輪大泉新田にある熊野社に加集権現として手厚く祭られている。彼の墓所は箕輪町木下養泰寺境内にあり、見事な宝篋印塔が建立され、偉業をたたえている。生誕地の愛媛県大洲市より子孫が定期的に墓参りを行って先祖の供養をしていることが多くの人々の手本となろう。

先に述べた「寄合新田」は加集空乃助が心血を注ぎ込んで、新田開発を実施した「大泉新田村」と隣合わせとなっており、あるいは、彼がかなり助力した可能性を示唆できるのではないだろうか。もし、仮にそうだとすれば、この溝状遺構は彼の設計、援助の基に集落民が一致団結して開墾に努力したのであろうか。目に浮かぶようである。

縄文中期土器片の出土はかなり標高の高い地域での集落の存在性を裏付けてくれた。

最後に炎天下の調査に多大な御協力、御援助をいただいた関係各位、関係諸機関に心より厚く御礼申し上げます。

(飯塚政美)

# 圖 版



遺跡地を東側より眺む（上）

遺跡地を南側より眺む（下）

図版2  
発掘調査状況



第1号トレンチ (左上)

第3号トレンチ (左下)

第2号トレンチ (右上)

第5号トレンチ (右下)





第6号トレンチ (左上)  
第8号トレンチ (左下)

第7号トレンチ (右上)  
第10号トレンチ (右下)



第11号トレンチ (左上)  
第13号トレンチ (左下)

第12号トレンチ (右上)  
第14号トレンチ (右下)



溝状遺構（東側より眺む）（上）

溝状遺構（西側より眺む）（下）



## 報告書抄録

ふりがな	かないばいせき							
書名	金鑄場遺跡(第Ⅵ次調査)							
副書名	ふれあい広場施設(ふれあい体験農園整備)							
巻次								
シリーズ名	埋蔵文化財緊急発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	友野良一 飯塚政美							
編集機関	伊那市教育委員会							
所在地	〒396-8617 長野県伊那市大字伊那部3050番地 TEL0265-78-4111							
発行年月日	西暦1999年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °..°	東経 °..°	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かないば 金鑄場	ながのけん いなし 長野県 伊那市 にしみのわ はびろ 西箕輪 羽広	11	2599			平成10年 7月23日～ 平成10年 9月9日	18,000	ふれあい 広場施設 (ふれあい 体験農園 整備)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
金鑄場	集落址	縄文時代 江戸時代	江戸時代溝状遺構		・縄文時代中期土器	近世の溝状遺構は 加集空之助に関連 するか		

---

---

金鑄場遺跡（第Ⅴ次～第Ⅵ次調査）

—埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—

平成11年3月12日 印刷

平成11年3月15日 発行

伊那市教育委員会

発行所 伊那市総務部企画課

伊那市経済部農政課

印刷 (株)小松総合印刷

---

---

